巻頭言

病院は人なり。
回復期を支える教育のチカラ

山中 誠一郎（やまなか せいいちろう）
当協会理事　PTOTST 委員会 委員長
（医療法人社団　輝生会 本部　理学療法士）

「烏合の衆になってはいけない」――。

回復期リハビリテーションの現場でスタッフ教育に長く携わる中で、この言葉は常に私の頭の片隅にある。烏合の衆とは、数は多いがまとまりのない集団を指す。回復期の質を危惧し、「これからは教育が要になる」と繰り返し語っていた故・当法人石川誠会長の言葉である。

回復期リハビリテーション病棟は、多職種が共通の目標に向かって協働し、その人らしい生活の再建を支える場である。一人ひとりの専門性が尊重され、チームとして機能してこそ、回復期の力は最大限に発揮される。だからこそ、「教育」が要であり、組織としての質を左右する基盤となる。

PTOTST 委員会では、セラピスト一人ひとりの専門性と成長を支え、多職種と協働できる実践力を育むことを目的に、回復期セラピストマネジャーの育成に取り組んでいる。セラピストマネジャー認定コースは、講義数 68（総時間 7,060 分）、研修日数延べ 18 日（試験日含む）、講師陣はレジェンド講師から委員を中心とした実践者などで構成され、知識・技術にとどまらず、考え、対話し、仲間と学び合う場として発展してきた。2025 年度で 15 期を修了、延べ 1,900 名を超える修了生が全国各地で活躍していることは、大きな財産である。

回復期病棟には若手セラピストが多く、スタッフ教育はマネジメント上の大きな課題である。働き方改革やハラスメント対策など、教育環境は年々複雑さを増し、「Z 世代」といった言葉で若手を一括（ひとくく）りに語られる場面も少なくない。しかし、世代間の価値観や仕事観の違いは、今に始まったことではなく、時代ごとに常に存在してきたものである。

山本五十六（いそろく）は、「実年者は、今どきの若い者などということを絶対に言うな。若者が何をしたかではなく、何ができるのか、その可能性を発見してやってくれ」と語っている。また、料理の鉄人・道場六三郎氏は、90 歳を超えて YouTube を配信し、なお若者から学ぶ姿勢を持ち、「料理も人も、交わってこそ進化がある」と述べている。先人たちの言葉は、教育の本質が「押し付け」ではなく、「信じ、引き出すこと」にあると教えてくれる。

2040 年を見据えた新たな地域医療構想の中で、回復期リハビリテーション病棟のあり方が、今まさに問われている。回復期の強みであるチームアプローチは、施設内にとどまらず、地域においても発揮し得る価値である。地域のための回復期、地域から選ばれる回復期・セラピストであり続けるために、専門性の向上とチームを育てるスタッフ教育は、これからも要の取り組みとなるだろう。

病院は人なり。

「貴院の強みは何ですか」と問われたとき、にっこり笑って「スタッフです」といつも答えていた石川会長のように、スタッフを信じ、仲間を信じ、先人たちの姿勢と新たなパワーを持つ若者から学びながら、ともに進化していきたい。

回復期の未来は、まさに「人」によってつくられる。